

ナウマン博士ゆかりの人と所をたずねて

Ⅳ. フランクフルト

山下 昇¹⁾

1. ナウマン博士に関する従来の情報

ナウマン博士の名は有名であるが、その人間像に関する情報はきわめて少ない。そのせい、たとえば『岩波西洋人名辞典』(1956)にも、その生没年は、1850頃-1927頃となっている。

とりわけ、本人と直接接触のあった人による情報が少ない。そういう意味の直接情報で、これまでに公表されているものを挙げると、古い方から順に次のとおりである。

ベルツの日記

ベルツ教授(Erwin Bälz)は「…26年間、東京大学医学部のお雇い教師で…『日本の近代医学の父』と呼ばれる…」人である(酒井シヅ、『ベルツの日記』〈岩波文庫〉の前書き)。来日したのはナウマンより1年後の、1876年6月7日であったが、生まれたのは1849年1月13日であった。だから、ナウマン博士より5年8月ほど年上である。その日記の中には数か所にナウマンの名が出て来る。けれども、博士の人物に触れているのは次の2カ所だけである。

「1876年6月26日 東京・加賀屋敷にて
…また感じのよい、いろいろな同郷人とも知合になりました——たとえば教師の…、それからネットー氏とナウマン氏(二人とも快活で、気取らず、しかも大いに才能のある人物です)。…」

「〔1879年〕8月4日(東京)
ナウマンは夢のような幸運に恵まれた。かれは日本地質調査部の長官となり、今回六カ月の休暇でヨーロッパへ、部員を雇うために出かける。それでコルシエルトは化学技師の地位を、ワグネル親父はお

そらく技術顧問の地位をそれぞれ与えられるそうだ。長官たるナウマン自身は二十五歳である！かれを隣人から失うことは不本意だ。かれはネットーやバイルと共に、自分の一番親しい友人仲間だった。もっとも、かれとは、その国民経済に関する意見に不服であるため、大いに争ったものである。けれども、これによってわれわれの友情がそこなわれることは無かった。自分は、人格のすぐれた点で、かれを大いに尊敬していた。お互いの隔たりにより、今後の交際が阻まれるようなことは、多分ないと思う。だがしかし、もしかれが細君を連れて戻って来た場合には？そうなると、われわれの愉快的独身仲間から消えてしまうのだ。…」

この後、ナウマン博士は9月3日、アメリカの汽船 City of Tokio 号で横浜からサンフランシスコに向かった。

当時横浜で発行されていた英字週間新聞 Japan Weekly Mail (1879年9月6日号)の記事によると、この船には前のアメリカ大統領グラント将軍一家や大森貝塚で知られる E. S. モース教授一家も乗っていた。ナウマン博士がドイツへ帰るのに、アメリカ経由のコースを選んだのは、アメリカの地質調査事業を視察するためであった。

同じ英字新聞の1880年6月19日号によると、その翌年の1880年6月14日、博士はマルセーユ発のフランスの汽船 Volga 号で横浜に帰って来た。このときは、ベルツ教授が心配(?)していたとおり、夫人同伴であった。

横山又次郎教授の記事

先に紹介した「文芸春秋」(1928)の記事の中で、横山教授はナウマン博士の気持ちについて、いろいろ

1) 信州大学名誉教授：〒153 東京都目黒区青葉台4-2-2

キーワード：ナウマン、ベルツ、森鷗外、横山又次郎、佐川栄次郎、江原真伍、岡田陽一、巨智部(忠承)、奈佐(本多)忠行、竹取物語、かぐや姫

ろと推測している。たとえば、地質調査所を辞めて帰国することになった事に関して、

「…以上の事がナウマン先生にとって、如何に悔しかったかは、察するに余りある。すなわち事業を創めて、それがやると緒につかんとするに当たって、いわば風来者〔原田豊吉博士を指す〕のために、その位置を奪はるるというのであったから、実際遺憾は骨髓に徹したに違ひない。また先生は同時に日本政府の処置をも怨んだ。かやうなわけであったから、先生がわが国を去る時には、不平がその胸中に充ち満ちていた。ドレスデンの演説は、即ちその一爆発に過ぎなかった。」と書いている。

この文章を丁寧に読めば分かることであるが、これはナウマン博士の気持ちを、横山教授があれこれと推測しているのである。ナウマン博士自身がそういうことを横山教授またはその他の誰かに話した、ということでは決してない。この点は大事なことである。

ナウマン博士の人間像に関する文章には、このような推測の記事が多いのである。そしてそれが、次々と請け売りされたりして広まっている。

そういう点については用心する必要があるけれども、横山教授の次の文章は、主として事実を述べたものと判断される。

「…去る明治42年〔1909年〕に、余が先生をメイン〔マイン〕河畔の居に訪ふた時、余は収入如何と切り出して見た。すると先生は微笑を漏らして、思はしくないと答えた。蓋し期待するだけの報酬は貰へないという意味らしかった。…〔中略〕

先生は、家庭に於ても、また幸福な人ではない。日本にゐた際、当時まだ年若であった細君を呼び寄せると、その細君は忽ち離縁の因をつくった。

それから再度向ふで迎へた細君は早世した。それで余がフランクフルト〔原文〕で逢つた時には、先生は独身で、その妹と、再度の細君(写真1)の遺した年頃のお嬢さんとの三人で、小さな家庭を作つてゐられた。」

前に紹介したような捏造記事を書いた人の文章であるから、これも慎重に読む必要がある。実際、「…細君を呼び寄せると、…」というのは正確ではない。事実は新婚の夫人を同伴して日本に再来したのである。しかし、その点を除くと、この文章には、特に重大な間違いがあるとは思えない。



写真1 ナウマン博士夫人

日本滞在10年の後、ナウマン博士がドイツへ帰国してから迎えた妻 ヨハンナ エルネスティーネ ハウポルト ナウマン夫人, Frau Johanna Ernestine Haupold Naumann, 1869年12月6日生, 1895年5月20日没。25歳のとき、二人の子供を残してミュンヘンで亡くなった。夫人は家族からヤンカ Yanka と呼ばれていた。手札判くらいの肖像写真が残っていて、それを基に描かれた全紙大の肖像画を撮影した。

とはいっても、家庭をつくっていたのは三人でなくて四人であった。この点は、同じ年、やはりフランクフルトのナウマン博士を訪問した佐川栄次郎氏の文によって知ることができる。

佐川栄次郎氏のナウマン博士訪問

佐川栄次郎氏については、江原真伍博士(1960)が次のように紹介している。

「日本におけるナウマン博士を記録するに先だち、前の三井鉱山技師長佐川栄次郎氏に就て少しく述べることにする。佐川氏が地質調査所に技師として務めた時は、ナウマン氏が帰国して10年位の後であったから先輩からナ氏に就て聞き、その遺品に接し、ナ氏の足跡を尋ね、ナウマン氏を知る機会が多かった。

後外遊の際はフランクフルト・アム・マイン市にナ氏を訪へ〔れ〕老懐〔原文〕を慰め歓談時を移した。されば佐川氏のナウマン記録は尤も〔最も〕信頼さるべきで、これより筆者の記録も専ら佐川氏に基ずき、其後の新しき研究に就ては自己の考を加味

することとした。」

「佐川氏のナウマン記録は最も信頼さるべきである、という江原博士の意見については、私も全く同感である。というのは、これまで見た限り、ナウマン博士の論文を最も広く読み、細部にいたるまで最も正しく理解し、かつ要点を正しく紹介しているのは、佐川氏の文(1936)であるからである。ただし、ここではナウマン博士の人間像に関する所だけを紹介する。

「[ナウマン]氏は1885年帰国後、暫時ミュンヘン大学助教授と[を]していたが、その後はマイン河畔のフランクフルト市を永住の地とし、世界的な鉱山会社たるメタル社、後には他の鉱山会社に関係していた。その間において氏が試みたる大旅行はバグダッド鉄道に関する資源調査(1890年)、黒海地方の石炭調査(1893)、メキシコ国鉱床調査(1897)であって、その土産として小アジア北部山脈の対曲構造説、メキシコ西部山脈は大洋側より押されて出来たとする説がある。その他、北部アフリカ、南東欧州等広く旅行した。



写真2 ナウマン博士の遺品、香爐

ナウマン博士が、日本の美術・工芸にも通じていたことは、これを佐川栄次郎氏が書き記している。この写真は、後でD. ナウマン氏が送って下さったもので、原図は四つ切り大のカラー陽画である。現物は見ていないが、多分銅製品であろう。

1992年7月号

氏は中年後において、回顧して自分の日本行は一生を決したといっているが、日本において始めて応用上の問題に触れ、自然に終生応用地質家に進んだ経路を言ったものと思われる。〔中略〕

氏は達筆であった。日本の地質地理に関する論文は二十種に上るが、最も重要な著書「日本群島構造及生成論」のごとき、豪壮なる文体のうちに、麗句を点綴せる、宛然日本風景論とも見え、時には熊狩の話が飛び出す等、地質論としては実に異例の書である。1893年に出版せる『金角からユウフラテスまで』という旅行記は好評を博し、忽にして売切となったといわれる。氏は音楽に長じ、また日本の銅器(写真2,3)・象牙・彫刻・木版・漆器の蒐集および鑑識は、郷国において重きをなしていた。

氏は1927年2月1日、フランクフルト市において七十四歳〔数え年、満年では72歳3月20日〕で没した。氏の友人の記するところによれば、晩年は病に悩まされながら、生来の勤勉と明朗を失わなかったとある。

氏が比較的長く逗留していた土佐のある地方には、揮毫を求めらるるままに、ドイツの詩人の句を



写真3 ナウマン博士の遺品、壺

左の香爐と同じで、D. ナウマン氏の提供。光の当て方を見ても素人の撮影でないことが分かるが、写真の専門家であるD. ナウマン氏のご子息の撮影によるものである。



写真4 タウヌス山脈の見える新式のアパート

佐川栄次郎氏は、1909年にフランクフルト・アム・マインに住んでいたナウマン博士をたずねた。博士が55歳くらいのときである。クレッテンベルク通り13番で、市の中心からいうと北東部の閑静な住宅街である。あたり全体が似たような大きな建物であるから、地上からではタウヌス山脈は見えなかった。

毛筆にて書いたものが残っている。佐川町のある宿屋にはこれが額になっていた。その下に私は化石採集家の外山嬌氏の『ノーマン先生』につき語るを聞いたのであった。この事を私はナ氏に話したら笑っていたづらをしたと言った。

この自称いたづらは相当なもので、氏は東京の役所においてピストルを身に蔵していたこともあった話が残っている。こんなことが氏の気力旺盛熱烈の人となりの一端を示すものであるが、…〔中略〕

1909年、私はフランクフルトにナ氏を尋ねて懇懇なる待遇を受けた。当時氏はテルスという鉱山会社に勤めていて、そこで技師長格の職務にあって、時々旅行もなし、忙しいというた。…氏は軽快なる青年の次男に市中を案内させた後、宅へ招待した。氏は郊外のタウヌス山脈を眺める景色のよい新式のアパート(写真4)に、次男のほかにも画に長ずるといふ少女と妹と共に住んでいた。夫人は先年没し、長男はドレスデン市工業大学の土木科の助手をしていた。

氏はいろいろな談話の中に秩父三峰山登山口の賛川の風景を挙げて絶賛した。諸種の日本風景に接触した氏が何故に特にこれを推挙したか。…〔中略〕

その後このことを巨智部博士に話したら、その賛川につきては面白い事があると語った。

『ある年、地質見学のためナウマン氏に引率せられた地質及採鉱の学生数名は荒川に沿うて秩父盆地に入った。その時、私〔巨智部〕は河床に砂金を嚙んだ礫を発見して、ナウマン氏に賞められた事等あって、進んで賛川橋畔の宿屋に泊った。始めて洋人の珍客を見た人々の驚きは多大であったが、宿の女主人は私〔巨智部〕に耳語して言うには、「あんな立派な人がこの世にあるとは思わなんだ」といかにも感激していた。』

青春に溢れたる白人の透徹清澄なる色彩は花の精とでも見えたであらうその人も、私の遇ったときは瘦型の光頭の好々爺となっていた。…』

ナウマン博士の孫に会うためドイツへ向かったとき、私の頭の中にあつた予備知識は上述のようなものであつた。

2. 博士の孫、D. ナウマン氏とE. ライアー夫人の談話

面会の場所と日時

ナウマン博士の孫にあたるお二人に面会し、その話をうかがい、またナウマン博士の数々の遺品を見せていただいたのは、1990年10月12日10時～12時30分のことで、場所はフランクフルト・アム・マインのライアー夫妻のお宅であった(写真5)。質問の項目については、あらかじめ筆者と東平氏とで整



写真5 ナウマン夫妻とライアー夫妻

左の二人がD. ナウマン夫妻、すなわちナウマン博士の次男の長男とその夫人。右の二人がライアー夫妻で、夫人はナウマン博士の長女の長女である。皆さん、どなたも大変大柄であるから、真ん中の男(筆者)が小さく見える。この男は、この年頃の日本人としては決して小さい方ではない身長164 cmであるが、高緯度のせいであらうか縮んでいたのかもしれない。

理し、直接には東平氏が質問し、西本夫人が通訳にあたった。この会談はテレビカメラに録画録音された。

ナウマン博士の両親ときょうだい

父 ト라우ゴット ハイニンリッヒ ナウマン

Traugott Heinrich Naumann

1823年12月15日生、1890年1月5日没。したがって、亡くなったとき65歳、ナウマン博士が35歳のときであった。

職業はマイセン市の Amtbaumeister であった。Amt は公職、Bau は建築または建設、Meister は組織の長である。

したがって、和訳すればマイセン市の建設局長とか建設部長、あるいは建築技師長といったようなことになるであろう。

母 ヴィルヘルミーネ エルネスティーネ

Wilhelmine Ernestine, 旧姓はボック (Bock)

1828年生、1889年没。したがって、亡くなったときは61歳、ナウマン博士が34歳のときであった。きょうだい 手書きの家系図のようなものがあった。それには生年月日を書いていないので、断定することはできないが、書いてある順序から推定すると、姉一人の次がエドムント、その下に5人の妹があった。

なお、後で紹介する墓碑銘によると、下の妹二人は、

ゲルトルート Gertrud, 1868-1964

マリー Marie, 1870-1949

である。したがって、ゲルトルートはナウマン博士より14歳、マリーは16歳の年下である。

ナウマン博士の妻 先に述べたように、1879年9月3日、横浜からドイツへ向かったとき、ナウマン博士は独身であった。翌年6月14日、再び日本にやって来たとき、彼は夫人同伴であった。この夫人はやがて一子をもうけた。しかし、その後離縁になった。このことについて横山教授は「…その細君は忽ち離縁の因をつくった。…」と書いている。この問題に関する若干の資料が、キッパース氏を通じて私の手元にある。けれども、これについてはなお関係資料を探索・確認する予定があって、まだ完了していない。いずれにしても、この段階では、佐川氏の「長男はドレスデン市工業大学の土木科の助手をしていた」という文によって、この子供が男子で

あったことが推定できるだけであった。

また、先に少し触れたミュンヘン大学の人事資料のうちに、身上書といったようなものがある。その中の家族欄には「男児1人、離婚せり」と書いてある。この文書には日付がないが、多分、1887年にミュンヘン大学の私講師になったときに提出されたものであろう。

さて、D. ナウマン氏と E. ライアー夫人の談話に戻ると、

E. ナウマン博士の二度めの妻は、

ヨハンナ エルネスティーネ ハウポルト

Johanna Ernestine Haupold

で、ヤンカ Yanka と呼ばれていた。

この夫人は1869年12月6日生、1895年5月20日没。したがって、ナウマン博士とは15歳の差で、亡くなったのは25歳5月、そのときナウマン博士は40歳であった。この夫人が亡くなったのはミュンヘンにおいてであったから、そのお墓はミュンヘンにあるという。以後ナウマン博士は終生独身であった。

ナウマン博士の子供

ナウマン博士とこの夫人の間には二人の子供があった。すなわち、次男は、

ロナルド カルル エドムント ナウマン

Ronald Karl Edmund Naumann

また、長女は、

ヒルデ マリア ヤンカ ナウマン

Hilde Maria Yanka Naumann

である。すなわち、佐川氏が「軽快なる青年の次男」ならびに「画に長ずるといふ少女」と呼んだ二人である。

なお、この二人の母、すなわちナウマン博士の二度めの夫人は若くして亡くなり、一方博士は長期の出張が多く留守がちであったので、この二人は博士の末の妹、いいかえると二人の叔母にあたるマリーに養育された。この叔母のことを二人は「リー叔母さん」(Tante Rie)と呼んでいた。

ライアー夫人とナウマン氏の談話

エディット ライアー夫人 (Frau Edith Leier) は、ナウマン博士の長女、すなわちヒルデ マリア ヤンカの長女である。夫君のライアー氏はフランクフルトの音楽学校の教授で、夫妻はフランクフルトに住んでいる。その夫人は、博士の思い出として次の

ように語った。

「祖父〔ナウマン博士〕は私が3歳のときに亡くなった。一緒に暮らしていたわけではないが、いつもポケットに真っ赤な林檎を入れていて、それを呉れたことを覚えている。」

ディーター ナウマン氏(Herr Dieter Naumann, Dipl.-Ing.)は、ナウマン博士の次男、すなわちロナルド カルル エドムント ナウマンの長男で、バイエルン内務省最高建築局(Oberste Baubehörde im Bayerischen Staatsministerium des Innern)の部長(Ministerialrat)の職にある。氏は次のように語った。

「父は、私が6歳のとき戦争で亡くなった。だから、父から祖父のことを聞いたことはない。自分も、子供のころ地質学に興味をもったことがあったが、現在は建築関係の公務員となっている。」と。

氏は1936年生まれということであったから、その父君が亡くなったのは1942年頃のこととなる。

なお、お二人の話によると、ナウマン博士はきょうだいたちから大変尊敬されていた。何でもよくできたからである、と。ナウマン博士は日本語についてはどうであったか、という質問に対しては、日本語に堪能であったし、また、語学が達者で、7~8カ国語ができたという返事であった。ナウマン博士の長男のことについては、その名がライノルト Reinold ということ以外は不明である。

ナウマン博士の遺品

この日、見せていただいたナウマン博士の遺品は次のようなものであった。

1. ノート。A4あるいはB5くらいの大きさで、厚さ2 cm くらいの製本したノート。初めの30ページほどに記入がある。その内容の一部については、下に紹介する。
2. 単行本『金角からユーフラテスの源流まで』
3. オペラの台本, Götterfunken(本誌, 446号 [1991年10月]にその表紙の部分を紹介した。)
4. アルトアチムート(写真6)
5. アネロイド気圧計(写真7)
6. 分割器(製図用のディヴァイダーで折り畳み式)
7. カンテラ。高さ15 cm ほどで、腰に吊り下げられるようになっている。(写真8)

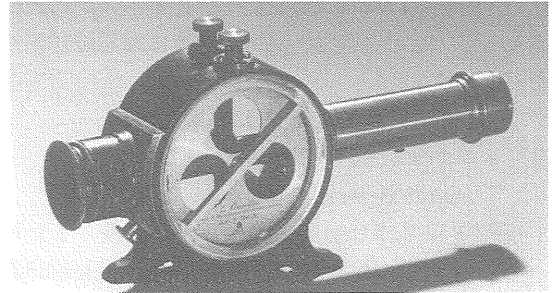


写真6 ナウマン博士の遺品, アルトアチムート
ナウマン博士の論文に出て来る Altazimuth である。望遠鏡と全円分度器という組み合わせから分かるように、仰角・俯角を測る計器である。仰角から山の高さを算出したとは、今から見ると呆れるようなことであろうが、それが必要であり、かつ役に立った、ということが、当時の調査の苦勞を表している。地質ニュース337号[地質調査所創立100周年記念号, 1982]の表紙とその説明(礎山功氏)を参照されたい。写真はD. ナウマン氏の提供で、四つ切り大。

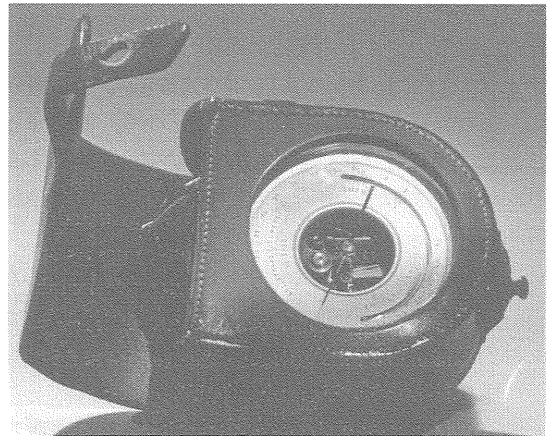


写真7 ナウマン博士の遺品, アネロイド気圧計(高度計)。写真はD. ナウマン氏の提供。

8. 携帯用のコーヒー沸かし(写真8)
9. チェスの道具一式
10. 東洋風のナイフとフォーク, 数組。ただし、これは日本製とは思えない。
11. 刀の鏢
12. 水彩画, 3点。縦15 cm×横30 cm くらい。このほかにも多数があるという。
13. 写真数葉
14. ナウマン博士夫人(Johanna Ernestine)の写真(手札くらい), およびそれを基にした肖像画(写真1)



写真8 ナウマン博士の遺品さまざま

手前の二つの金属製品のうち、左側はコーヒー沸かし。右側はカンテラ、すなわち携帯用のランプ

15. 博士号の学位記

このほかに、今回フランクフルトへは持参しなかったけれども、1ふりの日本刀がある。またきわめて貴重な日本画が2点あったが、懇望されて他に譲ったということであった。さらに、アルトアチムートとアネロイド気圧計、ならびに銅製と思われる壺と香爐について、後で四つ切り大の写真を送って頂いた。

また、1のノートの内容は35mmの写真スライドを、オペラの台本については電子コピーを送っていただいた。

ノートの内容の詳細は別に紹介する予定である。その内容は日本各地の地質に関するメモである。所々に地質断面図などのスケッチが含まれている。野帳というよりは、論文執筆のための覚え書きといったようなもので、最後の7ページは次の英文論文の抜粋である。

T. Honda, Report on the Geological Survey of the Environs of Sakawamura, Tosa, 1885

これは、徳田貞一：東京帝国大学地質学教室卒業論文及進級論文付索引図(地質学雑誌, 23巻, 90-95, 1916)の中にある「12奈佐(本多)・土佐々川村地方」のことでありに違いない。奈佐(本多)忠行氏は明治18年(1885)、すなわちナウマン博士がドイツへ帰った年に東大地質を卒業した人である。

このメモは1890年の論文「四国山地の地質」に利用されていて、その中では、佐川の地質に関する記述の中に Honda という名が数回出て来る。

この論文は1892年、山上萬次郎氏によって和訳
1992年7月号

されている(地学雑誌, 4集, 41~46巻)が、その中では本多でなくて奈佐という名になっている。

タウヌス山脈の見える家

会談の後、ナウマン博士がかつて住んでいた家を見に行った。クレッテンベルク通り13番(Klettenberg Straße 13)で、1909年に佐川氏が訪問した“タウヌス山脈を眺める景色のよい新式のアパート”(写真4)である。市の中央駅を基準にすると北北東にやく3kmの地域で、閑静な住宅街である。もちろん外から眺めただけであるが、あたり全部が4階建くらいの大きな住宅であるから、残念ながら路上からはタウヌス山脈は見えなかった。

ちなみに、タウヌス山脈はフランクフルト市のすぐ北にあって、ライン山地の南縁にあたり、デボン系の分布している所である。

ナウマン博士の墓

ナウマン博士の墓は、フランクフルト市の中央墓地(Hauptfriedhof)にある。中央駅からいうと、北北東に約4kmの所で、その敷地は南北1kmあまり、東西0.6~0.7kmの、やや不規則な長方形の地域である。西側のエッケンハイム通り(Eckenheimer Landstraße)という電車も通っている大きな道路に面して正門があり、またその前に駐車場がある。この門に入って左手の建物の前を通り、そこから北東に向かう放射状の道をたどる。途中にモニュメントのある小さな円形広場があって、それを過ぎて二つめ(?)くらいの環状道路に差しかかるあたり、右側の木陰に博士の墓がある(写真9)。正門から数百メートルであろうか。博士の墓にお詣りしたい人は、墓地入り口付近にある管理事務所で聞けば教えてくれるだろう。

墓石は水平に置かれ、黒御影といった感じである(写真10)。

3. おわりに

以上、今回のドイツ訪問によって得たナウマン博士に関する情報をできるだけ詳細に紹介したつもりである。そこで最後に、感想めいたことを二三付け加えて、まとめて替えることとする。

ナウマン博士は日本語ができた。

外国人には日本語が分かるはずはない？ ナウマン博士の論文の多くはドイツ語、一部は英語で書いて



写真9 ナウマン博士の墓, その1

日本の共同墓地では、いちめん石塔(墓石)の林であるが、ドイツの墓地は一見したところ森林公園のようになっていて、その小暗い森陰に、墓石が大抵は水平に設置されている。立っている二人はナウマン博士の孫の、D. ナウマン氏とE. ライアー夫人。



写真10 ナウマン博士の墓, その2

墓石は水平に置かれ、その面は地面から10 cm ほど高くなっている。大きさは目測で1.2 m×0.8 m くらい。石垢がついているので岩石の鑑定は無理であるが、黒御影といった感じである。墓碑銘は、

Hier ruht der #Geologe# Dr. Edmund Naumann,
♀ 1854-1927⊕. Marie Naumann, 1870-1949. Gertrud
Naumann, 1868-1964.

Geologe の両側に#で示したのは、活字で表すことのできない花紋様のような記号。また、♀は生誕を、⊕は死亡を表す。日本語にすれば次のようになる。

ここに休らうは『地質家』エドムント ナウマン博士、
1854生-1927没。マリー ナウマン、1870-1949。ゲルト
ルート ナウマン、1868-1964。すなわち、下の妹二人
も、ここに埋葬されている。

あるが、その他に、日本語で書いた数編の論文や建議文がある。論文は鉱山や地下水等に関するもので、建議文とともに、当然、博士が書いた原文を日

本人の誰かが和訳したものと推定されている。

一方、火山や地震に関する論文には、多数の日本の古い書物から噴火や地震災害の記録が集められている(山下, 1990)。これについてもまた、当然日本人の誰かが資料をドイツ語または英語に翻訳して提供した、と筆者も推定していた。けれどもよく考えてみると、この推定には確かな根拠があるわけではない。むしろ、「外国人には日本語が分かるはずはない」という先入観が、このような推測をもたらしたという心配がある。そしていま、博士の二人の孫の口から、「博士は日本語が堪能であった。外国語が7~8カ国語もできた」ということを聞いた以上は、この問題も慎重に再検討する必要がある。そこで、現在分かっていることを基に、博士の日本語能力を検討してみると、次のようなことになる。

ナウマン博士の書 博士の日本語能力を探る手掛かりの第一は、彼が自分で書いたことが明白な日本語の文書である。その唯一のものは、江原真伍博士が紹介しているもので、ナウマン博士が高知県領石の医師大塚氏に与えたものである。江原論文の写真が鮮明でない——筆者所有のコピーについて——ためよく読めないが、その下にある江原博士の説明文によると、毛筆で、上にドイツ語で“Wissen macht gelehrt aber erst das Leben macht den Wissen den Weise”, その下に漢字で「学専見聞知博経験」と書いてある。これについて江原博士は「独逸語の金言は元よりナ氏の書であるが、漢字の方は幼稚な書法より見て、同じくナウマン氏の書いたものと思われる」といっている。

書法が幼稚であるかどうかはともかく、その字体は草書である。その崩し方には疑問があるが、曲がりなりにも、このように崩した書き方ができたということは、日本語を書くことについてかなりの経験があったということを物語っている。それに、ドイツ語の金言をこのような日本語(漢文?)に訳するには、相当な力がなくてはできないことである。

日本語についてのナウマン博士の意見 1887年の「日本の自然地理、および日本人についての短評」という論文の中に次のような記述がある。

「[日本の] 進歩を妨げている大きな障害の一つは中国語への依存である。話し言葉だけは日本語であるが、その中においてすら、中国語の単語を使用することが教養の証しと見なされている。公文書、学

術書、新聞などは、すべて中国語と日本語との混合物で書かれている。もう一つ、中国語とはまったく独立の、ひらがなと呼ばれる書き方がある、これは主として婦人に使用されている。かたかなとして知られているもう一つの書き方は表音文字の体系で、主として中国語と組み合わせて用いられる。これらの文字の数は大変なものである。

もし貴君が日本人に、地図にある町や山の名を読むように求めると、彼がその地点を知っているのだから、彼はそれを読むことができない。普通、これらの名前は、日本語式にも中国語式にも読むことができるのであって、どちらの字訳が用いられているかは、常に不明なのである。…

山の中で仕事をしている調査員が、山や土地の名前を、その土地の人から教えてもらうとき、それを中国語で記録するために、必要な文字を尋ねるに違いない。

しかし、おそらく彼らは知らないであろう。そうすると、彼はそれを書くことができない。そして、『どうしようもない』という意味の慣用句である『仕方がない』を呟きながら、それを全く放棄してしまうかもしれない。

中国人と教育を受けた日本人とは、会話によってではなく、筆談によって考えを交換することができる。ところで、思考を伝達するための一般的手段として中国語を利用することは、ある面で利益になることもある。一千年もの間実用されて来たところの、この、いわば頭脳と中国文字との接木は、記憶能力を驚くほど発達させるのに役立って来た。これによって、日本人学生が初級学習の分野で普通に見せる頭のよさを説明することができるであろう。…」

ここに述べられているナウマン博士の意見については、さまざまに評価することができるであろう。けれども、それは別として、博士の日本語についての知識が相当なものであることが、この文から伺えるであろう。

ナウマン博士のオペラ作品 この作品については、その表紙の部分を本稿の第一回(地質ニュース、446号、53ページ、1991年10月)に簡単に紹介しておいた。その全訳を西本由美子夫人に依頼しておいたところ、最近になって訳稿が送られてきた。夫人はさらに推敲を重ねたい意向であるから、訳文を引

用したり内容を詳しく紹介したりすることは遠慮しなければならないが、これをナウマン博士の日本語能力の指標という観点から見ると、次のような点が注目に値する。

先に紹介したように、この劇の登場人物として、原作にはないイネ——かぐや姫の友達——やその婚約者のカメマツ、あるいは巡礼の長などが出て来るが、これらはもちろん脇役である。次に準主役とも言えるべき求婚者の数は、原作の5人より少ない3人になっていて、彼らの名前も原作とは異なっている。しかし、かぐや姫が求婚者に与えた難題は「火ねずみの皮衣」、「宝石の花の咲く木の枝」、ならびに「竜退治」——原作では竜の頸にある玉——であって、原作とほとんど同じである。

他方、原作では竹とりの翁の住所は明示されていないけれども、全体の様子や物語成立の時期から見て、奈良県あたりと推測される。ところが、このオペラでは「富士山に見える」所と明確に指定されている。この設定は、一見いかにも西洋人好みの不自然なもののように見えるが、これが終幕において意外な効果をもってくる。そういう観点から原作を読みかえして見ると、まさに最後の所で富士山が現れる。その富士山から立ちのぼる煙は、この物語の締め括りとなっていて、国文学の専門家にとっては、それがまた物語成立の時期を判断する一拠ともなっているらしい。ところが、大島三原山の噴火を150ヤードの至近距離から観察した経験をもつ地質家ナウマン博士(山下、1990)は、これを一大噴火として描き、まさに劇的な終幕に相応しい背景として活用している。

博士の作品のこのような内容からみると、博士は「竹取物語」を充分深くかつ正確に理解していたと判断される。そしてもう一つ大事なことは、博士がこの作品を書いたのが1901年であった、ということである。すなわち、それは博士が日本を離れてから15年後のことであり、そのとき彼は既にミュンヘンを去ってフランクフルトに移り住み、鉱山会社に勤めていた。だから、断定することはできないにしても、おそらく「竹取物語」の原作を読んで内容を解説してくれる人が傍にいたとは考えられない。

もっとも、「竹取物語」の内容を日本滞在中に聞き知っていた、ということも充分あり得ることである。しかし、そうだとすると、原作の重要な点をあ

れほどうまく作品に生かすことができた、ということは、オペラを書くに当たって、もう一度、あるいは二度・三度、原作を読み直してみたに違いない、と推定する根拠となる。

というわけで、上に紹介した三つの事柄を根拠として、ナウマン博士は日本語について相当な力をもっていた、と判断される。

ナウマン博士の家庭の問題

横山教授の思わせぶりな文章 前にちょっと紹介した文章の中に、横山教授は「〔ナウマン博士が〕日本にゐた際、当時まだ年若であった細君を呼び寄せると、その細君は忽ち離縁の因を作った。…」と書き、また別のところには、「御大将〔ナウマン博士を指す〕のお家騒動」とも書いている。この文章は、一人の人間の、おそらくあまり知られたくない私生活に関する事柄を印刷公表している点で、低級ジャーナリズムの「暴露記事」と違いがない。しかも、具体的な根拠を示さずに、「ほのめかして」いるのであるから、無責任というか、ずるい書き方である。

私の意見では、この文の中で横山教授が紹介、あるいは主張している事柄の主要な問題にとって、この二つはまったく書く必要のないことであった。それなのに、こういう書き方をしたことは、横山教授自身の品性の下劣さを表している、としかいいようがない。

とはいっても、事柄はすでに公表されてしまっている。かりに、横山教授自身が生き返ってこれを取り消したとしても、一旦印刷公表された文章は消え去るものではない。これについては、より客観的なデータを求めて、さらに調査を予定しているので、報告はその調査の完了後にしたい。

ナウマン博士の妾? もう一つ気になる問題に「ナウマン博士の妾」という言葉がある。岡田陽一氏(1955)の文の中にこの語が出て来る。明治10年〔1877年〕11月14日～12月9日、ナウマン博士の地質実習旅行に9名の学生が参加した。この旅行の途中から一頭の犬がついてきた。

「…いたずらの学生どもはこの犬にナウマンの妾の名前くめとつけてとうとう東京まで連れて帰って来て寮内に飼って置いたということだった。…」

これは岡田氏が父君から聞いた話である。これを信用すれば、ナウマン博士には妾がいたことになる。

1877年11～12月のことだというから、博士が日本に来て2年あまり、23歳のときである。

けれども、この学生たちは「いたずら」者たちであつたらしい。学生たちが、いたずら半分にひどいあだ名をつけたり、いい加減なうわさ話をしたりするのは、昔も今も同じであろう。そういう類の話を、当時採鉱冶金の学生であつた岡田一三氏が、後年になって、子息の陽一氏に、どのような状況で、どのような態度で話したか、それは不明であるが、まさか大真面目な態度で「ナウマン博士には間違ひなくくめという妾があつて、その証拠はかくかくである」などと語つたわけではあるまい。

そういうことを考慮すると、この場合も、岡田氏が人の人物評価にかかわる事柄を、証拠を示すことなく文章にして公表したのは軽率というほかない。当時ナウマン博士と最も身近にあつたベルツ教授が、独身仲間として3年あまり親しく交際した後で、「かれはネッターやパイルと共に、自分の一番親しい友人仲間だつた。…自分は、人格のすぐれた点で、かれを大いに尊敬していた」と書いていることに照らしても、私の気持ちは「信じがたい」の一語につきる。

しかし、そうはいっても、これもまた公表されてしまつた文章である。かつ問題は、絶対にあり得ない、と断定できるような種類のものでもない。この問題については、どのような調査をすればよいのか、今の私には見当もつかない。

ナウマン博士の気持ちは?

ナウマン博士の人間像について、これまで公表されている文章を見たかぎりでは、あまり評判がよくない。けれども、それらの文章をていねいに読んでみると、その多くは明確な根拠を示していない。あるいはまた、判断の材料が偏っていたり、何か偏見に囚われていたりするように見える。

森鷗外の懊悩は被害妄想ではないか? 先に紹介したように、鷗外は1886年3月6日のドレスデンにおけるナウマン博士の講演を聞いて、その日の日記に「此人久しく日本に在りて、旭日章を佩びて郷に帰りしが、何故にか頗る不平の色あり」と書いている。ところで、「頗る不平の色あり」と鷗外が判断した具体的な根拠は何であつたか?

前後の様子からみると、鷗外とナウマン博士が顔をあわせたのはこの時が最初であつたと考えられ

る。だから、鷗外が個人的にナウマン博士から不平の言葉を聞いたとは考えられない。また、この「式場演説」の中で、博士が「私は日本に不満がある」などと公言したわけでもないであろう。だとすると、つまるところ、ナウマン博士の講演の内容や態度から、鷗外は、ナウマン博士が日本に対して不満をもっているに違いない、と推測した、ということになる。

ところが、その同じ講演を聞いたドイツ人ロオトは鷗外の顔色を見て、「君は不平のように見える。何故なのか。私がみるところでは、ナウマンの論は大いに日本の将来の開化を願う気持ちがある。すこぶる妥当なもののように見える」と感じていたのである。

また横山教授(前掲の文)は、ナウマン博士の主張——教授はナウマン博士の講演を直接に聞いたわけではないが——について「だが余は一々之を記憶してゐない。ゐないのは、先生が唯我が国の事を赤裸々に、少しも遠慮なしに言ったままで、余を悔しがらせる程の嘘を吐いていないからである」とも書いている。その他、小堀桂一郎氏の詳細な検討においても、ナウマン博士の日本紹介はおおむね真実を述べたものと判定されている。

そうしてみると、鷗外の懊悩というのは、むしろ彼の被害妄想であったといった方がよい。

上野益三博士の推測は当たっているか? 同じ問題について、上野博士(1968)は、『「何故にか頗る不平の色あり」と森が目敏く見てとったのはなぜだろうか。ナウマンは後しばらくミュンヘン大学の助教授[正しくは私講師]になったが、自己の学問に対する自尊心が、それでは不満であったのであろうか。』と書いている。

ところが、この問題が起こったのは1886年3月のことであり、「普通新聞」での論争を含めて考えても1887年2月までのことである。そして、この頃、ナウマン博士はハビリタチオン(大学教員資格)を取得する過程にあったのであって、それを獲得し、私講師に採用されたのがようやく1887年3月末のことであった。ドイツの大学では教員になるのにハビリタチオンが必要であることは、ナウマン博士にとって自明のことなのだから、それが実現する前から「助教授」という地位に不満であったというのは筋が通らない。

さらにまた、上野博士は「彼の自信の強さは、多くの反対論にもかかわらず、一八九三年発表の『日本の地質と地理への新寄与』や、前にあげたフランクフルトでの講演でも、けっして自説をまげていないのでもわかる。しかし、ナウマンが論題を提供して論議を呼び起こしたからこそ、日本の地質学は進歩が促されたのだとの言い方もできるわけである。」とも書いている。

これは、「ナウマンの説は間違っていた。反対論者の説の方が正しかった。それにもかかわらず、ナウマンは自分の間違いを認めず、自説を押し通した」と上野博士が判断したことを表している。ところが、これは甚だ勝手な解釈である。この問題については、ナウマン博士やいわゆる反対論者、特に原田豊吉博士の論文を、かなり詳しく紹介しなければ納得のいく説明は不可能である。だから、別の機会——ナウマンの地質構造研究という論文を地質学雑誌に投稿している——にゆずるほかないが、結論を簡単にいうと原田博士の論文の方がおかしいのである。そのうえ原田博士の書き方は甚だずるい。そういうことをきちんと確かめないで、見当違いの判定を下した点では、上野博士の態度もまた軽率というほかない。

勳章の問題 そのような見当違いの推測記事が多いのに対して、ここに一つ、確かな資料に基づいて、なるほどと納得できる調査報告がある。すなわち佐藤博之氏が発掘した資料に基づき、池守清吉氏(1885)がまとめた報告書である。それは、未知であった資料の発掘、その資料についての吟味、その上での納得できる解釈、そして資料そのものの図版による紹介、となっていて、科学史研究の立場からみれば実に立派な研究論文である。残念ながら、これは簡易印刷による私的出版物であるから、一般的には見ることのできないものである。そこで、たとえば本誌のような公刊の雑誌に改めて印刷公表されることを期待しながら、ここには最初の部分だけを紹介する。

「明治8(1875)年8月17日に来日し、明治18(1885)年の帰国まで、文部省金石取調所勤務、東京開成学校教授、東京大学教授、内務省雇、農商務省雇としてわが国の地質学、地質調査事業に顕著な功績があったハインリヒ・エドモント・ナウマン博士は、その帰国にあたり、勲五等に叙せられ、双光

旭日章を授与された。

これは博士の満期解備帰国に先立って農商務卿松方正義が行った叙勲上申によるものであった。

ところが、この叙勲から約1年後の明治19(1886)年6月、外務大臣井上馨が博士の叙勲進級を上奏し、翌月、博士は勲四等に叙せられ、旭日小授章を授与されたのである。叙勲関係の文書によると、その経緯は次のとおりである。〔中略〕

この叙勲進級は、博士と同じく東京大学奉職の同国人ネットが叙せられた勲四等との均衡を重視するという見地から行われたものであるが、この上奏が博士とかかわりの深い農商務大臣や文部大臣によるものではなく、外務大臣であるのはどうしたことなのであろうか。」

役所というものの仕事ぶりを多少とも知っている人からみれば、これがどんなに奇妙なことであるか即座に理解できるに違いない。この論文の残りの部分を紹介することは遠慮するが、要するに農商務省の単純なミスということでは処理されたものようである。しかし、役所といっても、それを動かすのは人である。この種の問題処理に、役所がそんなうっかりミスをおかしたなどは、誰も信じないであろう。すなわち、故意というか、むしろ誰かの悪意を感じるのには、私だけではあるまい。

ナウマン博士の感情 この勲章事件に現れているような非礼きわまる処遇は、ナウマン博士にとってはきわめて不愉快なことであったに違いない。それを考えると、横山博士が「先生が我が国を去る時には、不平がその胸中に充ち満ちてゐた」と推測したのも、まるで見当違いということではないであろう。

けれども、ナウマン博士自身は、文章のうえで感情をあらわにすることは減多になかった。私が読みあさった中で、次の文章は、博士が自分の感情を率直に書き表した珍しい例である。すなわち、1886年のドレスデンにおける第六回ドイツ地理学者大会における講演の最後に、次のように述べている。

「昨年七月、帰国の途次、四国の海岸を通ったとき、ちょうど太陽が沈んで行くのに出会った。紅く映える夕焼けの空のもと、かつて自分がハンマーとコンパスと野帳を手にして歩き回った山々が黒くたたずんでいた。かの山々にも、また島々にも、なお多くの秘密が解明されるのを待っているのに…、そ

してまた、短い年月ながら苦勞にみちた仕事であったその成果は、つまるところささやかなものに過ぎなかったのか！…、と、私の心は沈んでいくのであった。

次の朝、九州の一角が長く海に突き出ている上に、朝日が輝いているのを見た。それから船は海流に乗り、多様な形をした海岸は急速に海の彼方に沈んでいった。

こうして私は、この美しい土地に悲しい別れを告げたのであった。しかし他方では、故郷へ帰る嬉しい期待をも抱いていた。」

ナウマン博士が地質調査所を解備となったのは1885年6月30日、故国へ向かってフランスの汽船Volga号で横浜を発ったのが7月12日であった。

それは1875年8月17日に日本に到着してからおよそ10年、細かくいうと9年と11ヵ月後のことで、そのとき博士は30歳と10ヵ月であった。博士号を獲得し、大学を卒業した満20歳から満30歳にいたるまで、社会人となって最も気力横溢していたに違いない10年間を、ナウマン博士は日本の地質調査事業の基礎を構築するため、そしてまた、そのための指導原理確立を目指して日本の地質構造研究に捧げたのであった。私がここに敢えて「そのための指導原理確立を目指して」と書いた理由については、別の機会に詳論するつもりである。

日本の地質学界はまだ博士を追悼していない

ナウマン博士は1927年2月1日に亡くなった。これに関する日本の地質学界の反応は次のとおりであった。東大地質の学生と卒業生たちによって創設され、その後日本の地質学界を代表する学会となった東京地質学会(現在の日本地質学会)の「地質学雑誌」は、1年後の1928年2月号(35巻、413号)の末尾の内外消息欄の、そのまた末尾の2行で次のように報告した。

近着の報導によれば日本の地質学の恩人にて元東京大学に教師たりしナウマン氏が死去されたりと。

また、実質的にはナウマン博士によって創案、創設、確立された地質調査所と縁の深い東京地学協会の「地学雑誌」は、その雑報欄に、「エドモンド・ナウマン博士の訃報」という2ページの記事を掲載した。しかし、それは博士の没後3年たった1930年3月(42年、493号)のことであった。その報

告は、遅延の事情を次のように説明している。

「日本の地質学の鼻祖とも云ふべきエドモンド・ナウマン博士は昭和二年二月一日フランクフルト・アム・マインで逝去された。当時、外紙に博士の訃報を載せるものがあつたが虚偽を確かむるに由なく、照問会合など荏苒今日に及び、稍機を逸した感がないでもないが、今改めて独逸から博士の履歴業績の一斑と共に悲報の誤りならざる旨知らして来たので茲に博士の訃報を掲載する次第である。…」

いずれも、報道としての第三者的な文章である。後者においては博士の論文目録と簡単な経歴や趣味の紹介が加えられているが、つまるところ、“訃報”という報道の文章であつて、追悼文ではない。

すなわち、日本の地質学界を代表する二つの雑誌は、博士の死をニュースとして伝えたただけであつた。

とにかく、日本の地質学界は、今日まで、ナウマン博士の死を悼むということを行っていない。(完)

文 献

本稿、I～IVの、それぞれの場所で、出典が分かるように配慮したつもりではあるが、ここにまとめて、重要な文献をかかげておく。

Baedekers Allianz Reiseführer (1989): Dresden, 2te Aufl. 236p. Karl Baedeker Verlag.

Baelz, E., [トク・ベルツ編, 菅沼竜太郎訳], (1979): 『ベルツの日記』(上). 岩波文庫.

江原真伍(1960): 日本に於けるナウマン博士. 立命館文学, 1960年11月号, 1-12.

Freunde der Bayerischen Staatssammlung für Paläontologie und historische Geologie München e. V., 1986, *Sand Kies und Knochen*. 40p., 3te Aufl. München.

池守清吉(1985): 『E. ナウマン博士の叙勲』. 私家版.

小堀桂一郎(1969): 『若き日の森鷗外』. 722 + xi. 東京大学出版会.

Mayr, H., 1989, Karl Alfred von Zittel, zum 150-jährigen Geburtstag. *Mitt. Bayer. Staatsslg. Palaeont. hist. Geol.*, 29, 7-51.

森 鷗外(森 林太郎), 『独逸日記』. 鷗外全集, 30巻, 85-191. 岩波書店.

森 鷗外(1886): [小堀桂一郎訳], 日本の実情. 小堀, 『若き日の森鷗外』, 229-242.

森 鷗外(1887): [小堀桂一郎訳], 日本の実情・再論. 小堀, 『若き日の森鷗外』, 257-263.

森 鷗外(1981): 『舞姫・うたかたの記, ほか』. 岩波文庫.

Naumann, E. (1875): Die Fauna der Pfahlbauten im Starnberger See. [博士論文]. *Archiv fuer Anthropologie*, Bd. VIII, Hft. 1, 1-51.

Naumann, E. (1885): *Ueber den Bau und die Entstehung der Japanischen Inseln*. 91p., Friedländer und Sohn, Berlin.

Naumann, E. (1886): Ueber meine topographische und geologische Landesaufnahme Japans. *Verhandlungen des Sechsten Deutschen Geographentages zu Dresden (1886)*, 14-28.

Naumann, E. (1886): [小堀桂一郎訳], 日本列島の地と民. 小堀, 『若き日の森鷗外』, 199-225.

Naumann, E. (1886): [小堀桂一郎訳], 無題[ミュンヘン人類学協会における講演の要旨]. 小堀, 『若き日の森鷗外』, 226-229.

Naumann, E. (1887): The Physical Geography of Japan, with Remarks on the People. *Proc. Royal Geogr. Soc.*, N. S., 10, 2, 82-102.

Naumann, E. (1887): [小堀桂一郎訳], 森林太郎の「日本の実情」. 小堀, 『若き日の森鷗外』, 242-256.

Naumann, E. (1890): Geologische Beschreibung des Berglandes von Shikok. in Naumann, E. und Neumayr, M., *Zur Geologie und Palaeontologie von Japan*. *Denkschr. Math. -Naturw. Classe d. Kaiserl. Akad. Wissensch.*, 57, 1-25.

Naumann, E. (1893): Die Fossa Magna. in *Neue Beiträge zur Geologie und Geographie Japans*, II, 16-36. *Petermanns Geogr. Mitt. Ergänzungsh.*, No. 108.

岡田陽一(1955): 東京大学最初の地質学実習旅行と猫精のこと. *地学研究*, 7, 187-194.

佐川栄次郎(1936): ナウマン氏小話, フォッサマグナ, 賛川風景. *地球*, 26, 47-55.

上野益三(1968): 『お雇い外国人, (3)自然科学』. 鹿島出版会.

山崎正和(1972): 『鷗外, 闘う家長』. 河出書房新社.

山下 昇(1990): ナウマンの火山および火山岩研究. *地質雑*, 96, 479-491.

山下 昇(1990): ナウマンの地震研究. *地質雑*, 96, 561-576.

山下 昇(1990): ナウマンの関東平野研究. *地質雑*, 96, 981-994.

Yokoyama, M. (1890): Versteinerungen aus der Japanischen Kreide. *Palaeontographica*, 36, 159-202.

Yokoyama, M. (1928): 森鷗外・ドクトル ナウマンを凹ます. *文芸春秋*, 昭和3年4月号, 135-139.

作者不詳, 阪倉篤義校訂(1970): 『竹取物語』. 岩波文庫.

YAMASHITA Noboru (1992): Visits to Relations and Surrounding Places of Dr. Edmund Naumann, IV. Frankfurt am Main

〈受付: 1992年1月20日〉